紫雄　第四十九号

若林先生から一言

二〇一五年の秋の本ゼミ周辺の動きで最も大きなショッキングな出来事は、「アミ」が十月十日で店じまいしたことでしょう。あの「パブレストラン・アミ」です。

歴代ゼミのOB会二次会、卒業式をはじめとして日常の夕食・飲酒の際にはほとんどをここで開催しておりましたし、さらに昼食会（昔の時間割では八時半一限開始だったため、昼が十一時半～十二時半でしたから会社などの昼休み前に入店できた）で毎週水曜日の昼食をとっていた場所でした。その頃は、つまり水曜の昼食は必ず焼肉ライスということになりますね。ゆっくり昼食を取りながら懇談していたいい時代でした。

飲み放題で二千円にしろ、とか、わがままも聞いてくれたし、また卒業式では必ずお店からシャンパンの差し入れがありましたね。さらにみんなには内緒でしたが、年末はお手製のイクラをパック詰めでもらい、キャンペーンの販促品であろうと思われるサントリーモルツのTシャツを何枚も頂戴してきました。閉店が決まってから、二週間のうち、二回ほどアミでバランタインを数本入れましたが、あのようなゼミの「メインダイニング」はもう二度と現れないかもしれませんね。今週末飲む約束をした十九期の学生もそれが決まるとすぐに「では、さっそくアミに予約を入れておきます！」という若ゼミ当然の流れになりましたが、事情を説明して他の店にいたしたくなく予約を入れてもらうことになりました。

ちょっと寂しかったのは、最後のアミを共にしたのが二年ゼミと応援団の学生で、一番本来ならアミ浸りの三、四年ゼミの連中ではなかった点でしょうか。駿河台にみんなが来てからは昔は昼か夜で一週間最低一、二回はアミ浸りだったですよね。最後のほうのアミの状態とゼミ三、四年の付き合いはやはり、昔のそれではなくなっていたのかもしれません。僕のゼミ学生との時間もだいぶ減ってきたのかもしれません。

二十三期ゼミ長挨拶

井上侑弥

こんにちは。二十三期ゼミ長の井上侑弥です。早いもので私たち二十三期が若林ゼミナールに入室して二年が経とうとしています。楽しい時間、充実した時間はあっという間に過ぎていくもので、この二年間は本当にあっという間に過ぎていったように思われます。

私たちはこれから就職活動に向けて準備をしていきますが、何もわからない「就職活動」という漠然とした大きなものに対して不安を抱いています。しかし、私たちはこの二年間若林ゼミナールで多くのことを経験してきました。

二年前、二十三期はマイペースで個性の強い人が多く、一人一人が全く違う方向を向いて動いており、若林ゼミナールとして一つの集団になることができませんでした。そんな時に先生を始め先輩方から熱いご指導をしていただき、二十三期は若林ゼミナールとして一つの集団になることができました。その過程ではお互いぶつかり合うことも多々ありましたが、その中でお互いが切磋琢磨し、高め合い、目には見えないかけがえのないものを得ることができました。この経験こそが若林ゼミナールでしかできないことであり、これからの私たちの財産になると思います。このすばらしい経験をすることができたのは、同期の仲間や心強い先輩方、元気ある後輩達、そしてなにより、私たちのことを常に考えてくださる若林先生のご指導のおかげであると心から思っています。

これから新たに二十五期がゼミ入室試験を経て入ってきますが、われわれ二十三期は中心学年の自覚を持ち、先輩方が築き上げてきた「若林ゼミナール」を下の代に受け継いでいきたいと思っています。また、これからも若林ゼミナール生としての誇りを持ち日々精進していきますので、今後ともよろしくお願い致します。

二十四期ゼミ長挨拶

花岡峻也

季節が夏から秋に向かい、少しずつ肌寒くなってきました。自分たち二十四期が受けた去年のゼミ入室試験を思い出し、月日が過ぎるのは本当に早いなと感じる今日

平成二十七年 若林ゼミ活動報告

内田聡

この頃です。私たち二十四期が若林ゼミナールに入り早一年近くが経とうとしています。この一年間通じて楽しいこと、大変なことなど様々なことがありました。特に、辛いことがあったときには若林先生、ゼミの先輩方がすぐに私たちに手をさしのべてくださり、私たち二十四期は辛いことを乗り越えてくることができました。ほんとうに二十四期一同感謝しています。ゼミ活動をしていく中で、自分たちはまだまだ成長しなくてはならないなと感じることが多く、学ぶことばかりの毎日です。一方で、前期に行った明大前商店街と明大生の結びつきを強くするというコンセプトのもと行われた明治大学和泉校舎内での代行販売を通じて、同期が少しずつまとまっていくことを実感し、自分たちが成長できていると感じる瞬間もあります。これからも、この現状に満足することなく、後期にも行う代行販売や、今後のゼミ活動に二十四期一同一生懸命取り組んでいきたいと思っております。最後になりますが、まだまだ未熟な二十四期に若林先生、先輩方共に熱いご指導のほどよろしくお願い致します。

二〇一五年夏合宿

今年は八月二十五日から二十七日に夏合宿を行いました。合宿の内容としては二十二期が前期を通して四班に分かれて行っていたそれぞれのテーマ関する論文の作成に励みました。その内容を二十一期に発表しアドバイスをして頂きました。

二十三期は前期から続けている教科書の読み合わせと前期の代行販売の反省を行い、マーケティングに関する知識を深めることと後期の代行販売に向けての良い準備ができました。今回のゼミで学んだことをこれからのゼミで生かしていきたいです。また、合宿を通して三日間共に過ごすことで、先生や先輩、後輩学年関係なくより新興を深めることができました。

論文

宴会班

高山晃一　井上侑弥
濱正悟　高澤美咲
熊谷実結

社会生活を送る上で避けては通れないもの、それが飲み会である。飲酒が出来る年齢になると、我々は様々なコミュニティーにおいて数多くの飲み会を経験することとなる。この飲み会には主に一次会と二次会の二つの形式があり、そのそれぞれにおいて各参加者の立ち居振る舞いや心持ちには様々な差が存在することを、我々は日々身を以て体験してきている筈である。既知のとおり、殆どの場合において二次会は席次を崩したり無礼講な部分が垣間見えたりと、一次会に比べてより人と人との距離を物理的にも心理的にも近付けさせるものであると考えられている。しかしながら現代の日本では酒離れの進行が叫ばれ、飲み会というもの自体の求心力も非常に低下していると考えられる。これは、会社や学校といった日常生活を送る場において様々なハラスメントの増加が近年度々問題となっているという事実が、飲酒環境においても暗い影を落としていることを表しているのである。そこで我々は、参加することでよりよい人間関係の構築に近付くことが出来る飲み会とはどのようなものであり、更に、コミュニケーションの潤滑剤としての飲

み会の場を身近にしていくためには何が重要であるのかを、この論文にて提言する。

歩きスマホ班

徳本真　嵯城健人
宮武幹太　吉田明世
岸田有里彩

近年の情報社会化により私たちの生活は豊かになったように思える。その代表機器としてあげられるものとしてスマートフォン・タブレット端末といったものがあげられるのではないだろうか。これらの機器は情報量も使用可能事項も多量になったというメリットがある一方、様々な問題を抱えている。例えば、視力低下・ストレートネックなどの健康被害だけではなく、ネット依存が引き起こす社会的問題としてインターネットゲーム廃人・引きこもりの増加、画面上の会話により対面しての他者とのコミュニケージョン能力の低下などが挙げられる。特にガラパゴス携帯に代わる最新の携帯電話の形であるスマートフォンは日本人の多くが所有しており、歩きながらスマートフォンを使用することの造語である「歩きスマホ」ということばの誕生はガラパゴス携帯の時代にはなかった造語の誕生であり、現在スマートフォンを所有する私たちが思考すべき異常的な事態であるのではないだろうか。私たちは歩きスマホの根本原因を解明し、その防止策を提案する。

化粧班

三浦広暉　岩部陸樹
織田洋実　宮道和
笠原千鶴　原田花恋

化粧とは何のために存在し、どのように発展してきたのだろうか。その定義は様々であるが、顔に顔料等を塗る行為とするならば、それは今から四、五万年以上前から存在した。「化粧」はその意味や対象を変えながらも、いまでは私たちの生活に自然に溶け込んでいる。

しかしながら、日本人の化粧は海外、特に欧米人を中心として「濃い」と多く認識されているということが文献研究を通じて明らかになった。我々はその要因を日本の中でも特に化粧の若者の化粧行動について焦点をあて、対人関係の構成に「化粧」が貢献していることを、「公的自意識」と「非言語コミュニケーション」の二つの観点から考察した。

そこで我々は化粧とコミュニケーションの関係をアンケートによって調査した結果、若者を中心に言語コミュニケーションが苦手であり、非言語コミュニケーションに頼って人との関係を築いていることが判明した。この結果が、我々が日本人の（特に若者の）化粧が「濃い」要因であると考察し、化粧はマナーや身だしなみとしての側面だけではなく、日本人の大切なコミュニケーションツールの一つという新たな側面を持っていることを発見した。

禅班

高安将　坂本陽祐
熊本旭良　根岸奈央
中込愛

近年、日本の若者は自分の身の回りの家事を母親に依存し、それを当然と考えている人々が増加している傾向にある。生活の大部分を占める家事の労働を貨幣評価すると、日本の GDP の四分の 1 の数値にもなる。しかし、その評価は低く、その労働の主な担い手である母親を手伝うという意識も低い。過去や他の国々のデータと比較しても、わが国の若者は他者への家事依存度が高いという結果は明らかである。しかし、家事をしていない人も、してくれている人への感謝、また自らやるべきであるという心はあると考える。

その事実を踏まえ、若者が家事に従事することの必要性を考えるため、幼少期から家事に従事してきた人と、してこなかった人で現在で家事達成率を検証する。それにより実際に幼少期から家事に従事することで将来の自立が促進されるという結果を証明する。また、やるべ心を行動に移すというきっかけとして、奉仕する、奉仕されることで感じられる好影響を示すことで、行動に移すきっかけづくりをする過去の文献には曹洞宗始祖の道元禅師による「典座教訓」という、奉仕の心を綴った文書がありその心を紐解き、現代に甦らせ、自ら積極的に家事をやることにより、自立できる力を身に着けることが可能になると考える。

第二十四期生 活動報告

代行販売班

神津ありさ

六月二十四日水曜日から七月八日水曜日(火曜日を除く)にかけて行われた代行販売について報告いたします。

私たちは、代々の若林ゼミナールの先輩方の活動を引き継ぎ、「Wacafe」という店名で今年も代行販売を運営しました。「明大前商店街の店舗と私たちが提携し、近年疎遠になっている明大前商店街と明治大学学生との結びつきを強める」というコンセプトのもと、明大前商店街の方々に協力していただき、そちらの商品を明治大学のキャンパス内パフォーマンスエリアで販売させていただきました。商品は昨年と同じコーヒヌールのチキンカレー、日替わりカレー、Limogesのはちみつプリンとロールケーキ、東南食堂(元アロイ)のガッパオ、ルボアのあんこと日替わりのクロワッサン、五十嵐青果店のキャラメル・カスタードのプリンの他に新しく大福寿司から教員向けに、にぎり多めで価格高めの贅沢寿司・生徒向けに巻物多めで価格安めの贅沢寿司を販売しました。新しくはじめた寿司は、価格がほかの商品に比べ高いという点で不安が多かったのですが、教員の方々に多く買っていただいただけでなく、生徒からも特に贅沢寿司の人気が高かったことが驚きでした。逆に生徒向けの満腹寿司が売れ残ることが多かったので、来年の課題にしていきたいと思います。また、今年から新たに一週間分の予約をまとめてしてくれた方は合計から百円引きという制度を導入しました。しかしも二目の予約が少なくなってしまったこと　や、お金の管理が複雑になってしまうという問題点が浮上しました。これも来年への課題になりました。今年は雨の日が多く大変だったのですが、雨の日、お昼にデリバリーへ行ったところその場で注文をしてくださる方が多くいらっしゃったので、次回から雨の日は当日デリバリーの制度を導入することにしました。

代行販売は思っていたよりもとても大変で、やりがいもとてもありました。班長を努めさせていただいたのですが、同期のみんなの支えもあり、無事終了することができました。実際に販売するだけでなく、沢山出た課題の改善点をみんなで考えていくこと、良かったところを探すこともとても勉強になりました。今後も試行錯誤を積み重ね、先輩方から引き継いだ活動を後輩に引き継ぎ、さらに良い代行販売にしていきたいと思います。